

2014年ユーロバイク展及び DEMO DAY2014 報告

(一財)自転車産業振興協会(自振協)は、日本の自転車関連産業の貿易促進のため、日本企業の国際自転車展示会への出展支援を行っており、2014年ユーロバイク展についても自振協による共同出展ブースを設け日本企業11社の出展を支援した。これに伴い、同展概要を報告する。

1. 2014年ユーロバイク展

①展示会概要

今年で第23回目となる世界最大の自転車展ユーロバイク(EUROBIKE2014)は、ドイツ南端のフリードリッヒスハーフェン見本市会場にて、2014年8月27日(水)~30日(土)の4日間、開催された。ビジネス関係の来場者数は前年比2.4%増の46,300人となり、出展社数は前年より40社多い54カ国・地域1,320社であった。また、会期中1,852人(前年1,883人)の取材陣が訪れ、最終日の一般公開日には21,100人(前年20,400人)の一般来場者が詰めかける等、会場は例年よりも多くの来場者でにぎわいを見せた。



シマノ (STEPS)



ジャイアント (Liv)

主催：メッセ・フリードリッヒスハーフェン有限会社

開催地：ドイツ・フリードリッヒスハーフェン見本市会場

会期：2014年8月27日(水)~30日(土) (8/27-29 ビジネスデー、8/30 一般公開)

展示会場及び面積：14ホール、100,000㎡(昨年同様 ※A3, A4 仮設、屋外増床分は除く)

入場者数：ビジネス来場者 111カ国 46,300人(昨年 111カ国 45,200人)

一般来場者 21,100人(昨年 20,400人)

出展社数 54カ国・地域 1,320社(昨年 54カ国 1,280社)

②高層化、個室化する大型ブース

ここ数年、いくつかの大型ブースでは、小間面積は従来通りにもかかわらず、展示台数を大幅に絞り込み余裕も持った展示形態が見られるようになっている。更にホール中央の通りに面する好位置にあっても、その通りに面して外側に向けた商品展示は行わず、高い壁や幕などでブース

全体を覆いこみ、一見すると外側からブース内部が見られないよう、個室化したような大型ブースが今年は一層増えた。長引く欧州不況による経費節減というより、来場者にブース内に立ち入ってもらい、商品をじっくり見てもらえるよう、顧客を囲い込む戦略なのか、もちろん、各小間に入場制限などがあるわけではないが、あるホールでは中央を貫くメインストリートの各ブースの両サイドに高い壁がそびえ、外側向けの展示が殆どない状態となり、自転車が大量に陳列された華やかな従来の雰囲気とは違う奇異な風景であった。



ユニオン・サイクル (VSF Fahrrad)



ホール B3 中央通りの様子

出展物に関しては、ここ最近の傾向として、自転車のフレームカラーは、数年前から特にスポーツ車に多く見られた、黒・白・赤又は青等をベースに、派手なロゴ等をちりばめたデザインは減りつつあり、例えば艶消しの黒に同色系のロゴデザイン等、落ち着いた配色も増えている。その一方で比較的価格の安い MTB や BMX 等では、緑、青、黄色及びオレンジ等、明るい蛍光色のフレームによる豊富なカラーバリエーションにより、特徴づけて差別化を図ろうとする試みも見られる。

また、MTB の中でもタイヤが特に太い、いわゆる「ファットバイク (Fat bikes)」は以前から北米系ブランドのブースでは見られたが、本年は欧州系ブランドなどにも波及し、更に多くのブースで見られるようになった。中にはファットバイクタイプの EPAC を出展しているブースもあった。ファットバイク以外にも、自転車ツーリングが盛んなドイツで人気の車種トレッキング車とは趣の違う長距離向けツーリング車 (ランドナー) やオランダやデンマーク等で需要の高い運搬車 (カーゴバイク) 等、それら自体は目新しくはないが、EPAC ブームという大きな流れの中で、その隙間を縫って EPAC 以外の車種を模索する動きも垣間見られた。これらの車種が各メーカーの商品構成上、定着していくのか、または数年前に欧州市場でブームとなったシングルギヤ車 (ピスト) ように一過性のものなのか、今後の各社の動向にも注視したい。



増えてきたファットバイク



ファットバイクタイプの EPAC 車 (左:ハイバイク、右:KTM)

③EPAC 出展は加速

本年、自転車 (EPAC) 及び電動自転車 (E-bike) と関連部品への注目度はさらに高まり、ユーロバイク展の目玉となっている。同展オフィシャルカタログによると、2014 年展示会の EPAC 出展者数は 83 社と前年並みであるものの、E-bike 出展は前年より 18 社も多い 176 社に達した。今や展示会の試乗車の主役は完全に EPAC や電動車となっており、欧州主要ブランドはメイン会場中庭を拠点に、また、アジア等の新興メーカーは離れの ZH ホールを中心として、各試乗コーナーでは連日、多くの人々で賑わった。

EPAC の車種としては、従来のシティ車、トレッキング車に加え、MTB 等のスポーツ車タイプの EPAC も年々増え、更にはロードバイクタイプの EPAC も見られるようになった。他社との差別化を図るため、小径車や運搬用車タイプの EPAC 等、新たな車種の EPAC を出展するブースも見られるが、多くの EPAC ブランドへは広がりを見せてはいない。また、EPAC よりモーター出力やアシスト速度の高い電動自転車「Speed Pedelecs」については、EPAC のような定義づけ (モーター出力 250W 超えず、時速 25km/h まで補助) がなく、車種としての位置づけが不明瞭なため、EPAC に続くような伸びはまだ見られない。現在、EU 当局では Speed Pedelecs について検討中であり、その判断により同車種の今後の方向性も定まってくるとみられ、EU 当局の決定内容が大変注目される。

電動アシストユニットに関しては、欧州市場ではボッシュが更に大きくシェアを伸ばした感が強い。同社ブースではボッシュを採用している EPAC ブランド一覧表が配布され、その数は 71 ブ

ランドにも及ぶとしている。本年の各完成車メーカーの EPAC 新商品の出展状況を見ても、ポッシュのユニット装着車が今年も最も多いと思われるが、シマノの「STEPS」をはじめ、パナソニックサイクルテック (Panasonic)、ヤマハ発動機 (Yamaha)、サンスター技研 (SUNSTAR) 及び日本電産コパル等の日系のユニットメーカーも出展活動を行う、もしくはユニット装備車が展示される等しており、日本企業も欧州市場に積極的に参加する意欲を見せている。現在はポッシュの台頭により車体中央部にモーターを配置するタイプが主流となっているが、主要な EPAC メーカーでは、車種毎に様々なタイプのユニットを装着する多様化も依然見みられ、電動ユニットのシェア争いはまだ続くとみられる。

図表 1: E-bike、Pedelecs 出展者数の推移 (単位:社)

出展車種	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
E-bikes(電動自転車)	9	16	30	47	76	110	101	156	158	176
Pedelecs(電動アシスト自転車)	5	4	15	23	30	52	55	88	82	83

※同カタログ上では電動アシスト自転車(EPAC)を Pedelecs と表記

④JBPI 共同出展ブース

本年 12 回目の出展となる自転車産業振興協会 (JBPI) ブースは、昨年と異なりアイランドブースの形態を確保することができた。ブースの位置と面積は昨年同様に B2 ホールの小間位置 B2-406 で 60 m²である。今回は(株)スギノエンジニアリング (SUGINO)、(株)三ヶ島製作所 (MKS)、(株)日東 (NITTO)、(株)ヨシガイ (DIA-COMPE)、パナソニック ポリテクノロジー(株) (PANARACER)、オーケー技研(株) (OGK)、(株)本所工研 (HONJO)、(有)アキコーポレーション (Aki Corporation/BE-ALL)、UCCO(株) (MULLER Japan)、(株)オオトモ (OTOMO/MINDBIKE) 及び合同会社ファイブリンクス (5LINKS) の合計 11 社と例年よりも多くの日本企業が共同出展した。



JBPI 共同出展ブース (左 ; ブース全景、右 ; HONJO)

JBPI ブースは来場者の往来が頻繁なホール中央の主要通りに面する好位置にあり、ペダル、ギヤクランク、ハンドルバー、ステム、ブレーキ、タイヤ、チューブ及び泥よけ等、日本の高品質な自転車部品等が集まる場所として既に知られている。加えて今回は完成車の出展が 4 社 (BE-ALL、MULLER Japan、MINDBIKE 及び 5LINKS) を数え、各所でシティ車、トレッキング車、ロードバイク、折りたたみ車及び小径車など様々な自転車が展示された。そのため展示会初日にはショーデイリー誌の取材を受け、「日本の自転車」として紹介する記事が掲載され、例年以上に当ブースは注目を集め、本年も各共同出展者の小間では新商品の展示を行い活発な商談等も行われていた。



JBPI 共同出展ブース（左；Aki Corporation、右；OTOMO 及び 5LINKS）

図表 2：2014 年ユーロバイク展共同出展企業一覧

出展社名 (英文名)	住 所 U R L	電話 F A X	主な出品物
(株)三ヶ島製作所 MKS	〒359-1166 所沢市糞谷 1738 http://www.mkspedal.com	04-2948-1261 04-2948-1265	ペダル
(株)スギノエンジニアリング SUGINO	〒630-8144 奈良市東九条町 287-1 http://www.suginold.co.jp	0742-62-5311 0742-62-5320	チェーンリング、クランク等
(株)ヨシガイ DIA-COMPE	〒571-0008 門真市東江端町 7-25 http://www.diacompe.co.jp	072-884-8020 072-884-8030	ヘッドセット ブレーキ等
(株)日東 NITTO	〒334-0013 川口市南鳩ヶ谷 3-23-7 http://www16.ocn.ne.jp/~nitto210/	048-286-7771 048-286-7770	ハンドルバー、 ステム等
パナソニックポリテクノロジー(株) PANARACER	〒530-0044 大阪市北区東天馬 2-9-1-8F http://www.panaracer.com	06-6354-7811 06-6354-7834	タイヤ、 チューブ
オージーケー技研(株) OGK	〒577-0066 東大阪市高井田本通 6-2-32 http://www.ogk.co.jp	06-6782-4353 06-6782-4357	幼児用座席
(株)本所工研 HONJO	〒130-0003 東京都墨田区横川 2-19-10	03-3625-2431 03-3625-2433	泥よけ
(有)アキコーポレーション Aki Corporation (BE-ALL)	〒570-0039 守口市橋波西之町 1-10-2 http://www.be-all.co.jp	06-6995-7880 06-6665-7884	トレッキング 車、シティ車等
UCCO(株) MULLER Japan	〒511-0009 桑名市桑名北浜町 628-5 http://www.mullerjapan.com	0594-27-3196 0594-27-1444	ロードバイク、 ホイール等
(株)オオトモ OTOMO (MINDBIKE)	〒559-0025 大阪市住之江区平林南 1-5-15 http://www.e-otomo.co.jp	06-6654-3165 06-6654-3309	小径車
合同会社ファイブリンクス 5LINKS	〒168-0081 東京都杉並区宮前 3-15-24-213 http://5links.jp/	03-3562-6811 03-5941-0255	折りたたみ車

⑤世界最大の地位を固める

米国大手ブランドのトレックが2年前にユーロバイク出展を取りやめた際、その動きに追随するブランドが出現するのではないかと懸念もされたが、昨年は大きな動きはなく、本年は米国大手ブランドのスペシャライズドとカナダのメーカー・コナ(KONA)が出展を取りやめた。しかしながら、上述のとおり出展者数、来場者ともに前年より増加しており、北米主要ブランドの撤退はインターバイク展でも既に見られた事象であり、同展への影響は限定的と思われ、各社が欧州市場では同展参加を重要視していることが伺える。

更に欧州随一の購買力を持つとされるドイツの二輪共同購入組合(ZEG)がEUROBIKEに参加した。ZEGは長らくケルン展(IFMA)に参加を続けたが、IFMA無き後、ミュンヘンで始まったISPO BIKEに出展し、ユーロバイク展とは対峙する状態が続いた。しかし、ISPOも2013年に終了を迎え、ZEGは再びケルンで会員向けハウスショーを開催するとともに、自前のスポーツ車ブランド「BULLS」とアクセルグループから年初に買収した独ブランド「ヘラクレス(Hercules)」を中心に本格的な参加となった。今回の出展はZEGとメッセ・FDHの双方にとって意義深いことであるだけでなく、ZEG傘下、ドイツの自転車小売主にとっても、盛夏の頃にミュンヘンへ出向くよりも、世界一の規模を誇るフリードリヒスハーフェンを来訪する方が好都合であることは想像に難くない。

現在、欧州の経済危機の先行きは不透明であり、更にウクライナ紛争等の不安定要素もあるなかで、目前の競合相手だったISPOが無くなった今、唯一不参加だった大企業体ZEGも出展者に加えることができ、ユーロバイク展は世界一の自転車展の位置を盤石にしたといえる。

次回EUROBIKE2015は2015年8月26日(水)～29日(土)の4日間の開催予定である。



ZEGブース(左: BULLS 右: Hercules)

2. DEMO DAY2014

①DEMODOY 概要

ユーロバイクのイベント「DEMO DAY」が、展示会に先駆け、前日の8月26日(火)に開催された。デモデーは、各メーカーより最新のスポーツバイクが提供され、設定された複数のコースで実際に試乗体験ができるもので、今回が8回目である。

今回のデモデーはこれまでとは異なり、会場が郊外から見本市会場(メッセ)隣接エリアに変更された。前回まではメッセ会場からシャトルバスで40分ほどの郊外にあるアルゲンブールで開催されていたが、今回、初めてメッセ会場東入口の駐車場の一角を使っての開催となった。これまでは移動にかなりの時間がかかり、出展社はもとより来場者からも不評であったが、今回はメッセホールに隣接しているためシャトルバスや車などでの移動の必要がなく、出展社や来場者にはたいへん好評であった。



デモデー会場入口とメッセ会場東入口

デモデー会場はメッセ会場東入口に隣接しており、東入口の真正面にデモデー会場入口がある。来場者はデモデー会場に入る前に、まず東入口側のメッセ会場内で入場券を購入する必要があるが、出展社パスがあれば無料である。また試乗をする場合も、このメッセ会場内での試乗は自己責任である旨の誓約書に署名し、腕にリストバンドを巻いてもらい会場に入ることになる。ただし一旦会場に入っても手にスタンプを押して貰えば再入場は可能で、会場を見てから誓約書を書きに戻ってくる人も見られた。

本年は立地の良さから来場者数は2,642人と前回2,318人を上回り、これまでで最高となった。また、取材陣も今回は42か国784人と前回37か国732人を上回ったほか、韓国、インドネシア、シンガポール、南アフリカ、ポルトガル等からの取材が初めてあった。取材活動は会場内の至る所で見られ、同催事への関心の高さが伺われた。

本年の会場には出展社147社152ブランドが集まった。これまでは会場が離れていたことから出展を見合わせていたメーカーの初出展もあった。完成車の主な出展メーカーでは、キャノデンール、スコット、ジャイアント、メリダ、センチュリーオン、ビアンキ、ピナレロ、ゴーストバイク等、部品・付属品等ではヘルメットやウェア関連など様々なメーカーの出展があったほか、会場隣接の利点から出展はしていないが自社製品をデモデー会場に持込みPRするメーカーも見られた。

試乗車はMTBを主体にシティバイク、ロードレーサーのほか、タンデムやリカンベントなどで、車種は多彩である。また試乗車の多くに電動ユニットが装着されており、シティバイクはもとより、本格的MTBやファットタイヤ装着のもの、リカンベントなどあらゆる車種に電動ユニットが装着されていた。



デモデー会場内風景



試乗用の電動MTB

コースは舗装路の全長が約 20km、MTB 用の未舗装路が約 4km で試乗車は各出展者から 100 台以上用意された。コースは大きく 3 つ (Route1~3) に色分けされており、一部未舗装路も含まれている。またこれとは別に MTB 専用の試乗エリアも設けられた。

当日は朝からどんよりした曇り空に加え、前夜からの雨で会場のあちこちに水たまりができ、昼ごろから雨も降りだす等、生憎の天気であったが、そうした悪天候にもかかわらず、来場者の多くはサイクルウェアを着込み、ヘルメット持参で何度も試乗に興じていた。

試乗車を借りる際は、試乗したい自転車のブースで申し出れば可能である。ブースによってはデポジットとして身分証明者やパスポートを預けるところもあり、試しに 2 か所で借りたが、どちらもパスポートを預けた。また、ヘルメット着用も求められたが、ヘルメットは展示会スポンサーの一つであるアブス (ABUS) が会場南側の試乗出入口にヘルメット貸出し専用ブースを構え、新品のヘルメットを無料で貸してくれた。

実際にコースを走ってみたが、コースのところどころに案内板が設置され色分けのコース表示で分かるようになっており、初めてでも分かりやすくなっていた。ただ舗装路は一般道のため通常通り自動車が走行している中、右側通行での走行には慣れない面もあり、天候不良ではあったものの、雄大な田園風景や林道での走行は快適であった。

次回の DEMODAY は EUROBIKE2015 が展示会開催前日 2015 年 8 月 25 日 (火) の予定である。



試乗コースの一部

以上

※写真はすべて筆者撮影（同展取材登録済）